

企画番号：2024-33

〈学生がつくった!!環境報告書 2024〉活動報告書

代表者：Y220755・野崎瑛里菜

メンバー：Y220759・西村拓海

アドバイザー教員：奥田哲士教授，横田岳人准教授

【目的】

本プロジェクトの目的は、龍谷大学が取り組む環境保全活動やエネルギー使用状況を具体的に分析し、それを環境報告書としてまとめることである。報告書の作成を通じて、大学構成員に持続可能性への意識を広め、エコキャンパス化の推進や大学全体の環境配慮の向上を目指す。報告書では特に、瀬田キャンパスを中心に、建物ごとのエネルギー使用状況や再生可能エネルギーの利用実態、環境教育活動の現状を明らかにし、課題と改善提案を示した。さらに、学生目線での意見を出すことによって、社会的インパクトの定量的理解を深め、龍谷大学のエコポテンシャルを評価し、その将来的な可能性を探った。

【計画】

1. 初期調査（6月中旬～7月上旬）

他大学の環境報告書を分析し、報告書の基本構成と目次案を作成。「エネルギー使用量」「再生可能エネルギーの利用」「環境教育および環境に関する取り組み」を主要テーマとすることを決定した。また、報告書の全体的なデザインや形式についても検討を行った。

2. データ収集（7月～8月）

学内のエネルギー使用データや環境情報を収集。電気使用量、ガス使用量、水道使用量の詳細データを環境生態工学課程の横田先生から提供いただき、建物ごと、月ごとの消費量を整理した。また、淡海環境保全財団への取材を計画し、学外からの情報も取り入れる準備を整えた。

3. 分析と文章作成（8月～10月）

集めたデータを基に、エネルギー使用の傾向を分析し、グラフや表を作成。また、再生可能エネルギー利用の実態や学内の環境教育の取り組みについて調査し、それぞれのテーマについて文章をまとめた。兵庫県洲本市にある龍谷ソーラーパークの現地調査も行い、現場で得られた情報を報告書に反映させた。

4. 成果発表（10月末）

作成した報告書を基に、学祭のポスターセッションで活動内容を発表し、多くの来場者に環境保全への意識を広めた。

【調査方法】

1. エネルギー使用量の収集と分析

横田先生から建物ごとのエネルギー使用量データを提供いただき、瀬田キャンパスを中心に月別の消費量をグラフ化。冷暖房需要が増加する夏季や冬季に使用量が大幅に増加する傾向が確認された。こ

れにより、建物ごとの利用特性や季節ごとのエネルギー需要を把握した。

2. 現地調査：龍谷ソーラーパーク

兵庫県洲本市にある龍谷ソーラーパークを訪問し、現地の状況を調査。周辺生態系への影響、光害の有無、発電効率を左右する要因（例：パネル周辺の植生管理）について現場で確認した。

3. 学外団体への取材

淡海環境保全財団の方とコンタクトをとり、マイボトル運動について詳しい情報を収集。取り組みの背景や成果、普及の課題について直接意見を伺い、報告書の内容に反映させた。

4. 学内情報の収集

大学 HP やシラバスから環境教育や研究活動に関する情報を収集。具体的には、SDGs に関連する講義内容や研究テーマ、学内で行われた環境イベントの実績を整理した。

【活動経過】

6月中旬から7月上旬にかけて、他大学の環境報告書を読み込み、基本構成や内容を分析。これに基づき、龍谷大学ならではの情報（例：龍谷ソーラーや龍谷の森、学内環境イベント）を取り入れる方針を決定した。7月には、電気、ガス、水道の消費データを収集し、瀬田キャンパスにおけるエネルギー使用状況を建物単位で比較・分析。8月以降はこれらのデータを報告書に反映させる作業を進めるとともに、学外団体への取材やソーラーパーク現地調査を実施。これらの活動を経て、10月末に学祭での発表を行い、報告書の内容を広く共有した。

【成果・結果】

今回のプロジェクトでは、龍谷大学瀬田キャンパスを中心に環境負荷データを収集・分析し、それらを基に「学生がつくる環境報告書 2024」を完成させた（図 1）。本報告書には、以下のような分析結果や提案を盛り込んだ。

1. エネルギー使用量の分析結果

- ・冷暖房の使用量が多い時期（夏季と冬季）にエネルギー消費が顕著に増加。
- ・各建物の使用量を比較することで、学内の利用状況やエネルギー依存性を明確化。
- ・特に利用者数が多い建物（例：図書館や講義棟）では、効率的なエネルギー管理が求められる。

2. 龍谷ソーラーパークの現地調査

- ・太陽光パネル周囲の草木管理が発電効率に影響を与える可能性が確認された。
- ・周辺生態系への影響や光害が少ない点が評価できる一方、長期的な管理体制の構築が課題として浮上。

3. 提案

- ・AI を活用したエネルギー消費の最適化システムの導入。
- ・利用者向けの環境意識向上プログラム（例：省エネキャンペーン）の実施。
- ・環境報告書を毎年更新する仕組みを確立し、進捗を評価・公表する体制の整備。

4. 環境教育と研究の強化

- ・SDGsに関連する講義や研究テーマを積極的に取り入れ、学生の関心を高める施策を提案。
- ・学生主体の環境活動（例：国際学生気候会議）のさらなる推進を促す。

これらの成果や提案を通じて、大学内での環境意識の向上やエコキャンパス化の推進に寄与することが期待される。



図1：学生が作る環境報告書 2024 の表紙デザイン

【結論】

本プロジェクトを通じて、龍谷大学の環境配慮の現状と課題を明らかにし、具体的な改善提案を提示することができた。報告書の公表により、大学構成員や地域社会への環境意識の浸透を図るとともに、持続可能なエコキャンパスの実現に向けた一步を踏み出す契機となった。今後も継続的なデータ収集と改善施策の評価を行い、龍谷大学が環境配慮におけるモデル大学となることを目指す。